桜色の明日

さら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
桜色の明日

【Ｎコード】
Ｎ９４５５Ｗ

【作者名】
さら

【あらすじ】
勉強もスポーツもなんとなくできて、可愛い女の子ともなんとなく付き合ってる、中学3年生の智哉。このままぼんやりと、退屈な毎日を過ごしていくはずだった。夕暮れの踏切で、１０歳年上の彼女と出会うまでは……。「頑張らない」中学生が恋をして、少しずつ大人に近づいていくというお話です。

1

夕暮れの空に響く踏切の音。
それはどこか物悲しくて……秋から冬へと向かっていく、この季節は特に……。
下りた遮断機の前に立ち、一人でその音を聞いていると、無性に人恋しくなってしまう。
だけどそんなこと、誰かに話したら笑われそうで、僕はその気持ちを胸の奥に閉じ込める。

＊＊＊

最近、陽が落ちるのが急激に早くなった。
買い物帰りの人たちはみんな急ぎ足で通り過ぎ、カレーや焼き魚の混じり合ったような匂いが、どこからともなく漂ってくる。
中学校の制服を着た僕は、警報機が鳴り止むのを今日もじっと待っていた。
さっき触れたばかりの、彼女の柔らかな唇の感触を、なんとなく思い出したりしながら……。

線路の向こう側に女の人が見えた。
スーツを着て髪をひとつにまとめた、どこにでもいるようなＯＬ風の人。
いつもだったら僕はそのまま目をそらし、その人の姿は茜色の景色の中へまぎれてしまっただろう。
だけど……僕はその人から目が離せなくなっていた。

僕の目の前を、風と音を立てて快速電車が通り過ぎる。それは一瞬のことなのに、その時の僕にはとても長い時間のように思えた。

遮断機が上がる。
止まっていた時間が動き出すように、車や人も動き出す。僕はその場に突っ立ったまま、あの人の姿を捜す。
いた……。
線路の向こうから、顔を上げてまっすぐ歩いてくるその人は、もう泣いていなかった。

＊＊＊

「美優（みゆ）も、トモとおんなじ高校行きたいなー」
ストラップのいっぱいついたスクールバッグを、意味もなくぶらぶら揺らしながら美優が言う。
「トモ、第一志望どこにした？」
「麻高」
「げっ、マジで？　美優、絶対無理だしー」
このあたりで二番目に頭のいい学校名を口にしたら、美優は目を丸くして首を振った。
「別に麻高じゃなくてもいいけど？　美優が行ける学校にしてもいいよ」
「……なんかその言い方、ムカつくわ」
ムカつくって言われてもなぁ……本当に高校なんてどこでもいいし。

自慢じゃないけど、僕は勉強しなくても、ある程度勉強ができた。だからこのくらいのレベルの学校なら、そんなに頑張らなくてもたぶん行ける。
ついでに僕はスポーツもできた。部活に入って遅くまで練習してるわけでもないのに、野球もサッカーも適当にできて、体育祭ではいつもリレーの選手だ。
だいたい汗を流して頑張るのって、だるいし、ダサすぎでしょ？

「だからトモのそういうとこが、ムカつくの」
美優はわざとらしく、ぷくーっと頬を膨らませる。
「なんにも頑張ってないのに、なんでもできちゃうとこ」
「しょうがないだろ？　できちゃうんだから」
美優が「くやしー」って言いながら、僕の背中をばんばんと叩いた。

美優は僕の三人目の「彼女」だ。
中三になって初めて同じクラスになった時、美優から「付き合って」と言われた。僕はすぐに「いいよ」と答えた。
他に好きな子はいなかったし、美優はなかなか可愛かったから。
それから毎日一緒に帰って、休みの日は二人で遊んで、キスをしてエッチもした。
そうなるのは思ってたより全然簡単で、美優も喜んでたし、なんとなくこんなもんかなって感じだった。

朝起きて、ご飯食べて、学校行って、授業受けて、友達と騒いで、美優とキスして、家に帰って、またご飯食べて寝る……僕の毎日はこうやって過ぎていく。
今までも、これからも、こうやって過ぎていく……はずだった。
僕が「あの女（ひと）」と出会うまでは……。

2

家に帰ると、玄関に女物の靴がそろえてあった。
また勇哉の彼女が来てるのか……そんなことを想像しながら靴を脱ぐ。するとリビングから、家族団欒って感じの笑い声が聞こえてきた。

「あら、トモ、お帰りー」
普段より数倍ご機嫌な母さんが、料理をテーブルに並べながら僕に言う。
なんか変だ……。
いつも帰りの遅い父さんが、くつろいでビールなんか飲んでるし、残業で遅いはずの宏哉兄さんも座っていて、その隣には僕を見つめる女の人……。
「トモ、この方、宏哉の『彼女』さんですって！」
僕の耳に勝手に舞い込んでくる母さんの声。でも僕にはそんな声どうでもよかった。
それより……そんなことより……この人は……。
「初めまして。三好小春っていいます」
そう言って、踏切の向こう側で泣いていた女の人は、僕の兄さんの隣でにっこり微笑んだ。

＊＊＊

「けど、あのクソ真面目な宏哉に女がいたなんてなー」
買ったばかりのギターをいじりながら、僕の前で勇哉が言う。
ちなみに勇哉は五歳上の二番目の兄。一番上が宏哉、勇哉よりもさらに五歳上。僕たちは男ばかりの三人兄弟だった。
「ちょっと気が強そうだったけどな」

「……そうかな？」
勇哉が僕を見てにやりと笑う。
「それに美人だった」
「ん……まあ」
「宏哉のヤツ、よくあんな美人つかまえたっつーか、よく宏哉なんかと付き合ってくれたよな」
俺のほうがよっぽどイケてんのにって、勇哉が付け加える。
勇哉はうぬぼれ屋で態度がデカくて、宏哉のことをちょっと上から見ている。そういうところが僕も似ていて、美優に言わせれば「ムカつく」んだと思うけど。

「俺、あの人に会ったことあるよ」
「え？　小春チャンに？」
勇哉が僕の顔を見る。
「会ったというか……すれ違っただけなんだけど」
「この近所に住んでるって言ってたからな。会っても不思議はねぇか」
勇哉はふっと笑って、どうでもいいように僕から目をそらし、スピーカーの音量を上げた。
タバコ臭い勇哉の部屋に、僕の知らない曲が流れる。
僕はぼんやりそれを聞きながら、あの日のことを思い出す。
夕暮れの街で会ったのは……踏切で一人泣いていたのは……あの小春さんだった。

さっき、小春さんを囲んで夕食を食べた。
母さんは終始ご機嫌で「好きな食べ物はなに？」とか「お勤めはどちら？」なんて彼女を質問攻めにしていて、僕はうんざりしていた。
頭がよくて、いい大学に入って、いい会社で働いている宏哉は、母さんの自慢の息子だ。

だけど「モテない」ってことが、唯一母さんの心配の種だったから、初めて彼女を連れてきた息子のことを、喜ぶのは無理もない。
でも「彼女」だったら、僕にも勇哉にもいるんだけどな。

帰り際、宏哉が車のエンジンをかけに外へ出た時、一人になった小春さんに声をかけた。
「あの、えっと……すみません」
小春さんは振り向いて僕を見た。
「ん？　あたし？　小春でいいよ」
「えっと……じゃあ、小春さん」
「はい？　何かしら、トモくん」
大人の余裕って顔つきで、小春さんが僕に笑いかける。
「俺、小春さんに会ったことありますよ」
「え？　あたしに？」
小春さんは少し考えるしぐさをしてから、またにこっと微笑んだ。
「ごめんね？　どこで……会ったかな？」
「いや、覚えてないならいいです」
覚えてるわけないか。「会った」というより「すれ違った」だけなんだから。
だけど……だけどあの時、泣いてたよね？
どうして泣いてたの？　誰に泣かされたの？
道端で本当に涙を流す人、僕は初めて見たんだ。

宏哉が外から小春さんを呼んだ。
「じゃあ、またね。トモくん」
小春さんが言って玄関から出て行く。僕は黙ってその背中を見送った。

3

「んっ」
キスした唇を離してから、もう一度チュって彼女の唇に音を立てる。
美優はちょっと顔を赤くして「トモ、だいすき」って僕に笑う。
「じゃあねっ」
「うん」
短いスカートをひるがえし、帰ろうとした美優が、僕に駆け戻って耳元でささやく。
「テスト終わったらエッチしようね」
ふたつに結んだ髪をぴょこんと揺らして、顔の横で小さく手を振る美優。
僕が手を振り返したら、美優は満足そうな笑顔で走って行った。

エッチしようね……か。
誰もいない公園を出て、住宅の間を歩く。
上手なキスの仕方も、エッチの時の避妊の方法も、聞いてもいないのに勇哉が教えてくれた。
だから僕は周りの中学生より、ちょっとだけ上手く女の子を喜ばすことができる。
だけど……だけどそれだけだ。
うさぎみたいにぴょこぴょこ跳ねる美優はかわいいけど、美優じゃなくても僕はいい。
美優が好きかと聞かれても、たぶん僕は答えられない。

少し歩くと踏切の音が聞こえてきた。だけど今日はどこかが違う。
ああ、そうか。空が青いんだ。
テスト一日前の今日は、授業が午前中で終わりだった。

「トモくん？」
ぼーっと通り過ぎる電車を見送っていた僕は、その声に弾かれるようにして振り向いた。
「やっぱりトモくんだ」
自転車に乗ったまま、僕の前でいたずらっぽく微笑む人は、あの小春さんだった。

＊＊＊

「もう学校終わったの？」
小春さんが自転車を押しながら、僕の隣を歩いている。
真っ昼間に十歳も年上の綺麗なお姉さんと歩く僕。それはまったく予想外の展開だった。
「テスト前は半日なんです」
「なあんだ。サボったわけじゃないんだ」
そう言って小春さんはあっけらかんと笑う。
なんか、意外と……アレだな。
最初会った時はビシッとしたスーツ姿で、この前うちに来た時は女らしいロングスカートをはいていた。でも今日は、黒いタートルネックのニットにデニムのパンツ。
そしてその格好が、一番この人に似合ってるような気がする。もしかして性格も、勇哉の言うとおりに、さっぱりした人なのかもしれない。

「小春さんこそ、仕事は？」
僕の質問に小春さんはふふんと鼻で笑う。
「あたし仕事辞めちゃったからプーなのよ。ちょっと体調崩してね。この前キミの家に行った時に話したけど？」
そうだっけ？　あの日僕はかなり動揺していて、肝心なことを何ひとつ聞いてなかったことに今気づく。

「えっと、じゃあ今日は何しにうちに？　宏哉兄さんなら会社のはずだけど？」
「今日はお母さんに会いに。ほら、この前言われたでしょ？　宏哉がいない時でも、気軽に遊びに来てねって」
だからってその言葉通り、兄さんのいない家に来るかな、フツー？
そう思ったけど、小春さんはにこにこしながら、自転車の前かごに載せてある、お弁当らしき包みを指さしている。
「あっ、でも、トモくんもいるなら、お寿司もう一個買ってくるんだった」
「いや、いいです。俺、お寿司嫌いですから」
「えっ、うそ。こんなに美味しいのに……でも、ヒロとおんなじね」
ヒロとおんなじ……ヒロ……小春さんは宏哉のことをヒロって呼ぶんだ。宏哉の……彼女だもんな。
そんな当たり前のことを考えながら、僕は小春さんと歩く。
遠ざかっていく踏切の音。保育園の園庭で遊ぶ子供たちのはしゃぎ声。
いつもの道を歩いているだけなのに、なんだかいつもと違っていた。

4

リビングから笑い声が聞こえてくる。
僕は教科書を閉じ、書きかけのプリントをぐしゃっと丸めポケットに突っ込む。
そしてわざとらしく音を立てて階段を下り、母さんたちのいる部屋をのぞいた。

「あ、トモくん、ごめんね？　うるさかった？」
僕の不機嫌そうな顔を見て、そう言ったのは小春さんだった。
「いいのよぉ。静かにしてたって、どうせこの子は勉強なんかしやしないんだから」
母さんが笑いながら寿司をつまんでいる。
はぁ？　それが受験生に言う親のセリフか？　だけどそんなのはもう慣れっこだから、僕は何も反論しない。

母さんが期待してたのは、長男の宏哉だ。
勉強する時は宏哉につきっきりだったこと、まだ小さかった僕でも覚えてる。
そして宏哉は母さんの期待どおりの成績を収め、期待通りの学校へ行き、期待通りの会社に就職した。
次に母さんが期待してたのは、次男の勇哉だ。
だけど勇哉は言うことをきかなかった。
俺は俺のやりたいことをやるとか、口だけはカッコイイことを言って、今はバイトをしながらバンドなんかやってる。世間で言うフリーターってやつ。
初めのうち、そんな勇哉に口うるさかった母さんも、今はもうあきらめているようだ。
そして母さんは、僕には期待するのをやめた。また裏切られて、

ショックを受けるのが嫌なんだろう。
期待通りに育ってくれる息子は、一人いればいいと思ったのかもしれない。
どっちにしろそんな僕のことを「恵まれてるな」って勇哉は言う。
そうなのかな……そうなのかもしれないな。
僕は僕の好きなことをやって、好きに生きればいいんだ。
それに文句を言う人は、誰もいない。

やかんでお湯を沸かしてカップラーメンを作る。
母さんのおしゃべりを聞き流しつつ三分間待ってたら、いつの間にか隣に小春さんが立っていた。
「甘いものは嫌い？」
すっと伸びる小春さんの細い指。その指先と一緒に、皿にのった一人分のチョコレートケーキが、カップラーメンの横に並ぶ。
「嫌い……じゃない」
「やっぱり。ヒロとおんなじ」
そう言って小春さんがにこっと微笑む。
なんでも宏哉と同じにされるのは、なんとなくシャクだけど、僕はそのチョコレートケーキをありがたく受け取る。
「それ、小春さんの手作りなんだって。お店で売ってるケーキみたいね」
リビングから聞こえる、母さんのご機嫌な声。
「小春さん、お菓子なんか作れるのねぇ。きっといいお嫁さんになるわよ」
「そんなことないですよ」
「ねぇ、結婚したら同居なんてどうかしら？　むさ苦しい男どもは追い出すから」
ちょっ……結婚とか同居とか、勝手に話進めるなよ。しかも男は追い出すとか言ってるし。
「子供が生まれたら、私が孫の面倒みてあげるわよ？　最近は共働

きの夫婦が多いんでしょ？　私の友達もそうしてるの」
「そう……なんですか」
小春さんが息を吐くようにつぶやいて、軽く笑った。
ほらな、完全に引いてるじゃんか。

「母さん」
「なによ？　トモ」
僕はポケットの中から、ぐしゃぐしゃに丸めたプリントを取り出す。
「志望校書いたら、親の印鑑もらってこいだってさ」
母さんは僕の書いた学校名を見て、あからさまに渋い顔をした。
「あんた……こんな学校しか行けないの？」
そこは美優が行こうとしている学校だった。僕は麻高から三つランクを落として、そこに書き替えた。
別に高校なんてどこでもよかったから。
「いいだろ。早くハンコ押してよ」
「まったくもう。どうして今、こんなもの出すのよ」
ぶつぶつ言いながら立ち上がる母さん。僕はその隙に小春さんにささやいた。
「今のうちに帰っちゃいなよ。あの人の話、まともに聞いてたら夜が明けちゃうよ？」
小春さんは僕の隣でふふっと笑う。
「そうかもね。でも楽しかった」
そして印鑑を捜している母さんの背中に声をかけた。

「すみません。あたし、そろそろ失礼させていただきますね」
「あら、やだ、小春さん。まだゆっくりしていって？」
「今日はこの後予定があって。また今度、お邪魔させていただきます」
「そう？　予定があるなら仕方ないけど」

母さんは本当に残念そうにつぶやく。
男ばかりの家庭に女が一人。話し相手が欲しい気持ちもわからなくはない。
だけど本当に宏哉が結婚したら、お嫁さんは苦労するだろうなぁ……。
「それじゃあ……勉強頑張ってね？　トモくん」
小春さんは子供をあやすかのように僕の頭をぽんぽんと叩いて、にっこり微笑んだ。

5

「トーモ！」
テスト最終日の朝、廊下で美優に声をかけられた。
「おはよっ」
「おはよ」
「勉強した？」
「してない」
「してないくせに、さりげなくいい点とか取っちゃうんだよねー、トモって」
そう言いながらにこっと笑って、美優はノートの切れ端に書いたような手紙を渡す。
「これ、あとで読んでね？」
そしてぱたぱたと足音を立てながら、僕の前から去って行く。

学校で毎日話すのに、家に帰れば電話もメールもするのに……なぜか女の子はこういうものを渡したがる。
折り紙のように複雑に折りたたまれた手紙を開くと、カラフルなペンで書かれた丸っこい字が並んでいた。
『今日ママがいないの。テスト終わったら美優んち来ない？』
僕はその手紙をくしゃっと丸めてポケットに突っ込む。
何気なく目に映ったのは、窓の外の四角い空。
めんどくさいなって思った。
テストをサボって、美優のことも無視して、このままどこかに行っちゃいたいって思った。
そんなこと……できるはずないのに。
チャイムの音が廊下に響く。今日の一時間目のテストは英語だったか数学だったか……。
一夜漬けで覚えた英単語を思い出しながら、それと一緒に小春さ

んのチョコレートケーキの味も思い出していた。

＊＊＊

「トモ……好き」

美優のベッドの上でキスをする。このまま押し倒してやっちゃうのは簡単なこと。

僕は気持ちよくて、美優は喜んで、だったらなんにも迷うことはない。

それなのに……今日の僕はなにかが変だった。

「どこが好きなの？」

「え？」

「だから、俺のどこが好きなの？」

僕から体を離して、美優はきょとんとした顔をする。

「どこって……顔？　かな？」

「他には？」

「髪型とか、いつもオシャレな服着てるとことか……あっ、あと、キスが上手いとこ」

美優は冗談っぽくそう言って笑ったけど、僕は笑えなかった。

そんな僕を見て、美優は少し怒ったような口調で言う。

「じゃあ聞くけど。トモは美優のどこが好きなわけ？」

「俺は……美優を、好きって言ったこと一度もない」

美優の表情が変わった。

当たり前だ。僕は今、美優を怒らせるようなことを言ってるんだから。

「じゃあ……じゃあトモは……美優のこと好きじゃないの？」

「……わかんない」

「わかんないって何？　美優のこと、好きでもないのに付き合ってたの？　好きでもないのにキスしたの？」

「だから……わかんないんだよ」

「バカっ！　サイテー！」
美優はそばにあったクッションを僕に投げつけ「マジむかつくわっ！　出てけっ」って言った。
僕は美優に言われたとおり部屋を出る。

なんであんなこと言ってしまったんだろう……言わなければ今まで通り、美優とは上手くやっていけたのに。
上手く？　何を上手く？　キスを上手く？　セックスを上手く？
それが何になるというのか？　そんなことして何が残るっていうのか？
何もない。僕の心には何も残らない。
そしてその時、僕はやっとわかった。
僕は――美優のことが、好きではなかったってこと。

6

ふらふらした頭のまま家に帰ったら、玄関に女物のスニーカーがあった。
リビングから聞こえるのは、今夜もハイテンションな母さんの声。
また、来てるんだ……あの人。
僕はリビングをのぞかずに、黙ったまま階段を上る。

「おっ？　トモ、今帰り？」
二階に上がった途端、部屋のドアが乱暴に開き、勇哉とばったり会った。
「テスト終わったんだろ？　彼女のウチ行ってたんか？」
「まあ……」
「うまくやったんだろうな？」
へらへら笑っている勇哉を無視して、自分の部屋のドアノブをつかむ。
「メシ食わねーのか？」
「勇哉が家でご飯食べるの、めずらしいね？」
「小春チャン来てるからな。俺も弟として顔出しとくかな、みたいな？」
いいな……この人はいつも能天気で。
「トモも来いよ。宏哉がにやけるとこ、見てやろうぜ？」
「俺はいい。食欲ないし」
まだ何か言いたそうな勇哉を残し、僕は真っ暗な部屋に入るとベッドの中にもぐりこんだ。

＊＊＊

「トモ……トモくん？」

いつの間に眠っていたんだろう。うっすら目を開けたら、暗闇の中に女の人の顔が見えた。
「……なっ？」
「あ、起きた」
弾けるように起き上がった僕の前で、小春さんがにこにこ笑っている。
「どうした？　彼女にでもフラれた？」
「な、なに言って……」
「勇哉くんが言ってたから」
勇哉のやつ……勝手なことを……。
「小春さんにはカンケーないでしょ」
「そうだけど？」
いたずらっぽい笑みを見せながら、小春さんは勝手に僕のベッドに腰かける。
長く伸ばしたストレートの髪から漂うのは、美優とは違うシャンプーの香り。

「せっかくテストが終わったってのに、暗い中学生だなーって思って」
「ほっといてください。中学生には中学生の悩みがあるんです」
大人のあんたにはわからないだろうけど。
だけど小春さんは変わらぬ調子で、夢見る少女のような表情で言う。
「それでもあたしは、あの頃が一番楽しかったな。戻れるものなら、中学生のあたしに戻りたい」
薄闇の中で、小春さんの目が僕を見る。
「……今だって、楽しいんでしょ？」
イエスともノーともとれる顔つきで、小春さんは笑う。
「宏哉兄さんと付き合ってて、楽しいんでしょ？」
「うん」

嘘だ。
「じゃあ、なんで泣いてたの？」
僕の言葉に、一瞬小春さんの視線が揺れ動く。
「あの日、踏切のところで……なんで泣いてたの？」
「やだ……見られてた？」
小春さんはそう言って、ぎこちなく微笑む。そしてその後、ちょっと真面目な顔をしてつぶやいた。
「大人には大人の……コドモにはわからない悩みがあるのよ」

ドアの外で声がした。「トモ、大丈夫かぁ？」って言いながら、宏哉が部屋に入ってくる。
「食欲ないって……また腹でもこわしたか？」
宏哉は僕の前に、胃腸薬と水の入ったグラスを置いてくれた。
口数は少ないけど、宏哉はさりげなく僕に優しい。
だから僕には、宏哉が「モテない」ってこと、実は信じられないんだ。
「小春。送っていくよ」
「うん。それじゃあね、トモくん」
小春さんが宏哉と部屋を出て行く。
僕は何も言わないまま、二人の並んだ背中を見送っていた。

7

次の日学校に行くと、周りの僕を見る視線が変わっていた。
女子はあからさまに僕を無視して、男子もなぜかみんな、僕と美優が別れたってことを知っていた。

「だって美優から一斉メール来たもん」
小学校からずっと一緒の、ちょっと気が弱い啓介をつかまえ、廊下で問い詰めた。
「『美優はトモと別れましたー』って顔文字つきで。そのあとお前の悪口が永遠と」
「たとえば？」
啓介がちらっと、僕の顔色をうかがってから答える。
「『ちょっとモテるからって調子に乗るな』『トモは女とやることしか考えてない』『マジウザい、死んでくれないかな』」
バカだ。バカだ、あの女は……。
「あ、これ俺が言ったんじゃないからね。美優が言ったんだから」
居心地悪そうに苦笑いをして、啓介が背中を向ける。
「でもひどいよね。これ、クラス中に回ってるよ」

廊下にぽつんと残された僕のことを、ちらちら盗み見してるクラスのやつら。
そんな視線を振り払うように教室に入ったら、ささっと何かが引いていくような気配を感じた。
別にいいよ。こんなの明日になれば、みんなすぐに忘れる。
僕や美優のことをいつまでも騒いでいるほど、クラスのやつらだって暇じゃないはず。
それに僕は、美優にそれほど恨まれても、文句を言えないことをした。

だけど……それから何日たっても、僕の周りのチクチクした空気は変わらなかったのだ。

＊＊＊

自分が完全にクラスで浮いていると感じ始めたのは、美優と別れて一週間後のことだった。

その日も僕は校門をひとりで出た。

美優と帰らなくなってから、僕と一緒に帰ってくれる人は誰もいなかった。

クラスのやつらはあいかわらずよそよそしかったし、啓介に声をかけてもいつものようにへらっと笑うだけ。

別にいいけど。一人じゃ家に帰れない小さな子供じゃないんだし。

美優といつもキスした公園を通りかかる。

茜色に染まった遊具のそばに、僕は人影を見つけて立ち止った。

「美優？」

そこにいたのは美優と……啓介だった。

「あれ、トモじゃん。久しぶりぃ」

さっき教室で見かけたばかりなのに、美優はそう言って僕に笑う。

そしてその隣の啓介は、なんとなく決まり悪そうに、さりげなく僕から目をそらした。

「なに……やってんの？」

声なんかかけなきゃいいのに……無視してそのまま通り過ぎればいいのに……僕はそのセリフを美優に言っていた。

美優はそんな僕を見てほんの少し微笑む。

「トモには言ってなかったよね？　美優ね、啓介と付き合ってるの」

「えっ」

美優が啓介と？　ウソだろ？　ありえない。そんなの絶対ありえ

ない。
そう思った瞬間、僕は啓介の制服を引っ張り、自分のもとへ引きずりよせていた。

「美優と付き合ってるって……お前、マジか？」
啓介は気弱そうに僕をちらっと見て、また目をそらす。
「お前あの時言ったじゃん。ひどいよねって」
「あれは……ウソだよ」
ふっと顔を上げた啓介は、いつものおどおどした表情ではなかった。
「ひどいのは……トモのほうじゃないの？」
「それは……」
「好きでもないなら、最初から付き合ったりするな！」
啓介が僕の手を振り払って体を離す。その向こうで美優が小さく笑っている。
「啓介は……好きなのかよ」
僕の声に振り向く啓介。
「お前は美優のこと……好きなのかよ」
「好きだよ」
啓介が僕に言った。はっきりと、堂々と、僕の目を見て……。
「美優がトモと付き合ってる頃から、俺は美優のことが好きだった」

8

踏切の音が聞こえる。
空は色を失い、あたりが闇に包まれ始める。
寒かった。もう冬が、すぐそこまで来てるみたいだった。
暗闇の中にちかちかと灯る、警報機の赤い光。それを見ながら、ポケットの中に手をつっこむ。
引っ張り出したのは、ぐしゃぐしゃに丸められたテストの答案。
生まれて初めて取った人生最悪の点数は、先生が発表した平均点よりかなり下。
いつもと同じようにしていただけなのに……周りのレベルが上がったんだ。
なんだかんだ言いながらも、みんな受験というものを意識し始めている。
「おーいっ！　トモくんっ」
踏切の向こうから声が聞こえた。
手を振りながらにこやかに駆け寄ってくる、小春さんの姿が見えた。

「もうっ、何度も呼んでるのに、無視するんだもん」
「無視なんかしてません。聞こえなかっただけ」
去って行った美優と啓介の後ろ姿と、答案用紙に書かれた情けない数字が、僕の頭でごちゃまぜになっている。
「またうちに来たの？」
「お母さんとランチに行ってね。帰りにお邪魔したらこんな時間になっちゃって」
「そうですか……じゃあ」
さっさとその場を立ち去ろうとした僕の手を、小春さんがぎゅっとつかんだ。

「ねぇ、ちょっと付き合わない？」
「え？」
「スカッとするとこ、連れてってあげる」
僕の前でいたずらっぽく笑う小春さんの髪が、冷たい風に流れるように揺れた。

＊＊＊

小学生の頃、父さんと何度か来たことのあるバッティングセンターで、小春さんはボールをかっ飛ばしていた。
「スカッとするよ。キミもやったら？」
「俺は……いい」
「相変わらず、しょぼくれた子ねぇ、若いのに」
小春さんはため息まじりにそう言ってから、自販機で缶コーヒーとココアを買って、僕の座っているベンチに腰かけた。

「はい。キミはこっち」
目の前に差し出された甘ったるそうなココア。僕だってコーヒーぐらい飲めるのに。
「なんで……こんなことするの？」
小春さんの手からココアを受け取りながら、僕はつぶやく。
「好きな人の弟だからって、ここまですることないでしょ？」
「迷惑だった？」
「迷惑……です」
僕の隣で小春さんがふっと息を吐く。ボールを打つ金属的な音が、耳の奥にやかましく響く。
「……だったら、断ればいいじゃない」
ゆっくりと顔を上げたら、僕の顔をのぞきこんでいる小春さんと目が合った。
「来たくないなら、断ればよかったじゃない」

「でも……そっちが強引に引っ張ってきたんじゃないか」
「ちゃんと断ってくれれば、無理やり連れてきたりしないわよ。誘拐犯じゃないんだし」
小春さんはあきれたような表情をしながらも、僕から目をそらそうとはしない。
なんとなく気まずくて、目をそらしたのは僕のほうだ。そんな僕に小春さんが言った。

9

「キミね。自分の意思ってもんをちゃんと持った方がいいよ？　そうしないと将来、絶対後悔するから」
自分の意思を持て？　将来後悔する？　担任教師みたいなこと言うなよな。
「ま、あたしも、偉そうなこと言えないけどね。トモくんには、恥ずかしいとこ見られてるし」
小春さんがふっと笑って、ベンチから立ち上がる。
女の人にしては高い身長。僕と並ぶとそんなに変わらない。
だけどその指先も、腕も、腰も、なにもかもが細くて……。
ふわふわした美優とはなんとなく違う、大人の女の人。

「コドモにはわからない悩みって、なに？」
そう言えばまだ、あの日の涙のわけを聞いてなかった。
小春さんは静かに振り向いて、座っている僕を見下ろす。
「この前言ってたじゃん。コドモにはわからない悩みがあるって」
僕の声ににっこり微笑み、小春さんは答える。
「踏切の音って……なんだか寂しいと思わない？」
「え？」
突然のその言葉に、僕は思わず声を詰まらせる。
僕がいつも胸の奥に忍ばせていた気持ちを、今、この人が代弁してくれたから。
「踏切の音と、保育園で笑う子供たちの声と、どこか幸せそうな夕飯の香りと……そんな中に一人で立ってたら、寂しくて悲しくて情けなくて……」
僕の前で小春さんが、ちょっと照れたように笑う。
「泣きたくもないのに、涙が出ちゃった」
心臓がとくんと小さく動く。

あの日の夕焼けの色。いつもと変わらない街の音。生活感の漂う匂い。
僕も同じものを感じていた。なんだかわからないけど、泣きたくなりそうな……。

「でも……小春さんには宏哉がいるじゃん」
そうだよ。泣きたくなったら何も聞かずに抱きしめてくれる、彼氏がいるじゃん。
宏哉兄さんはそういう人だって、僕が一番知っている。
「そうね……ヒロはいつも優しいから。あの人と一緒になる人は幸せね」
「だったら結婚しちゃえば？　もう親も公認なんだし、二人ともいい歳なんだし」
なに言ってんだ、僕は。これじゃ「結婚」だとか「同居」だとか言ってる、母さんと変わらないじゃないか。まったく余計なお世話だ。
僕の言葉に小春さんは微笑む。そしてゆっくりと僕から視線をそらし、遠くを見つめるような瞳でこう言った。
「だけど……あたしはきっと、キミたちの家に歓迎されない」
「は？　なに言ってんの？　うちの母さんなんて、小春さんのことめっちゃ気に入ってて……」
「でもあたし、子供産めないから」
ぴたっと空気の流れが止まった気がした。
「あたし子宮がないの。だから子供は産めないのよ」
小春さんはそう言って、少し寂しそうに笑う。
子供には子供の悩みがあって、大人には大人の悩みがあって……。
やっぱり僕は大人の悩みなんて、これっぽっちもわかってなかったんだ。

10

我が家に「結婚話」が持ち上がったのは、その日の夜だった。
だけど「結婚」って言葉を口にしたのは宏哉じゃなくて、勇哉のほうだったから驚きなんだ。

「え？　結婚？　勇哉、あんたいきなり何言ってるの？」
喉が渇いたから何か飲もうと思って冷蔵庫を開けたら、僕の耳に母さんの声が聞こえてきた。
「だからできちゃったんだよ」
「は？　何が？」
「だから子供！　子供ができたの！」
何か言いたげに、口をぽかんと開けている母さん。新聞から目を離さないまま、漫画みたいにゴホンと一つ咳払いする父さん。
勇哉はポケットに手をつっこんで、いつもと変わらず俺様的な態度で立っていて、宏哉はそんな弟のことを黙って見ていた。
「ちょっと……勇哉、あんた今、何て？」
「ったく、何度も言わせんなよ。俺の彼女に子供ができたから、結婚するって言ってんの」
「結婚するって……あんた簡単に言うけどね。フリーターの分際で、どうやって妻や子供を養っていくつもりなのっ」
「大丈夫だよ。そのへんはちゃんと考えてるから」
「何を考えてるっていうの！　あんたは甘いのよ！　昔から何もかもが甘いの！」
「あーもう、うるさいっ！　俺、この家出て勝手にやるから！」
どかどかと音を立てながら、勇哉が階段を上っていく。
「ちょっと待ちなさい！　勇哉！」
母さんはヒステリックな声を上げていて、父さんはずっと新聞を見たままで、宏哉は一言も口を出さなかった。

「勇哉っ」
僕はそんな勇哉のあとを追いかけて階段を駆け上る。
ふてくされたような顔つきの勇哉が、部屋の前で僕に振り向く。
「ほんとに……出て行くの？」
「ああ」
「ほんとに……結婚するの？」
勇哉はぐしゃぐしゃと赤っぽい髪をかいて、僕の顔を見下ろした。
「トモ。まさかお前まで、俺のこと信用してないわけじゃねぇよな？」
信用……してるわけないじゃん。
僕にあんなに「ゴムつけろ」って言ってた人が、彼女妊娠させちゃったんでしょ？
「俺だってちゃんと、将来のことくらい考えてんだよ」
「バンドでメジャーデビューして食っていこうとか、思ってないよね」
「アホか！　俺はそれほど世間知らずじゃねぇ！」
勇哉がそう言って、僕の額にデコピンをする。
「今までずっと考えてたんだ。考えて俺が決めたんだ。だから誰にも文句は言わせない」
そして部屋に入ると、すぐに小さなバッグを肩にかけて出てきた。

「この部屋、宏哉にやるって言っとけ」
「え？」
「出来の悪い息子がいなくなって、出来のいい息子の嫁さんが同居して、お袋にとっては一石二鳥ってやつだろ」
ふふんと鼻で笑って勇哉が言う。だけど僕には、勇哉が無理してるようにしか見えなかった。
「出来の悪い息子とか……言うなよ」
勇哉が薄く笑ったまま僕を見る。

「俺にとっては……頼りになる兄ちゃんなんだし」
「トモ……お前、いいヤツだなっ！」
大げさにそう言いながら、勇哉は僕の体をわざとらしく抱きしめる。
「ちょっ、やめ……兄弟でキモいって……」
「大丈夫だよ」
ぎゅーっと抱きしめられながら、僕はその声を聞く。
「大丈夫。トモも、出来の悪い息子なんかじゃないから」
へへっと笑って勇哉が離れた。そしてそのままデカい足音を立てて、階段の下へ降りていく。
「マジで……行っちゃうの？」
下で母さんの怒鳴り声が聞こえたあと、玄関のドアが乱暴に閉まった。

11

「智哉くんはね、『やればできる子』だと思うんです」
進路面談の日、担任の女性教師は、僕と母さんに向かってそんなことを言った。
『やればできる子』……僕は今まで『やらなくてもできる子』だと、自分のこと思ってた。
「志望校、変えるって言ってたわね？」
「はい」
今さら美優と一緒の高校なんて行けるわけないし。
「そうね、この前のテストはちょっとまずかったけど、二年生の内申はよかったんだし、今からでも頑張れば……」
「相南高校は行けます？」
「えっ……」
僕が口にした、ここら辺ではトップの学校名に、担任は言葉を詰まらせ、母さんはあきれた顔で僕を見た。
「どうせなら、トップ目指した方がいいと思って」
「あんたは無理に決まってるでしょ！　あの学校入るのに、宏哉がどれだけ勉強したか……」
横から口出しする母さんを無視して言う。
「先生、無理ですか？」
「目標は確かに高い方がいいけど……でももうそろそろ、志望校はちゃんと決めないといけないし……」
「じゃあ志望校は相南にします。俺は『やればできる子』なんでしょ？　先生」
中三を受け持つのが初めての、まだ若い担任は、困ったような顔で笑った。
高校なんてどこでもいいって、今でもやっぱり思ってる。

だけどちょっとだけ、自分の意思ってものを宣言してみたかった。
それと勇哉が言っていた「トモも、出来の悪い息子じゃない」って言葉が、本当かどうか確かめてみたかっただけ。
学歴なんかで、出来が良いとか悪いとか、決まるわけないってわかっているけど。

学校の教室は、相変わらず居心地が悪かった。
合唱コンクールの打ち上げに、クラスで僕だけ誘ってもらえないとか、教室で配られるプリントが、さりげなく僕だけ回ってこないとか……これって世間で言う「イジメ」ってやつなんじゃないかって思う。
僕が自殺でもする時は、お前ら全員の名前遺書に書いてやるからな、なんて死ぬ気もないのに考えてみる。
教室では「全然気にしてない」って態度をとりながら。
ああ、こんなところが美優の言う「トモのムカつくところ」なのかもしれないな。

休み時間も放課後も、土曜日も日曜日も、やることがないから勉強した。
だから幸か不幸か、塾の無料体験で受けた模擬テストでは、人生で最高にいい点を取った。
このままいくとマジで相南行けちゃうかもなんて思い始めた頃、僕はいつもの踏切で、久しぶりにあの人に会った。

「よっ、元気？」
小春さんに会うのは、あのバッティングセンターに行った日以来だ。
あれから小春さんは家に遊びに来なくなったから。
「元気ですよ。俺は」
「うん。よしよし」

小春さんはにこにこ笑いながら、僕の頭をくしゃっとなでる。
子供扱い……なんかすごくムカつくんだけど。
「なんで最近、うちに来ないの？」
小春さんは自転車に乗っていて、スーパーかどこかの帰りみたいだった。
「宏哉とケンカでもした？」
「してないよぉ？」
マフラーをずらして口元を見せて、小春さんは白い息を吐く。
「じゃあ、どうして？」
小春さんは何も答えなかったけど、その微妙な表情から「あれのせいなのかな」って思った。

子供が産めない小春さん。
子供なんて、いないならいなくてもいいじゃないかって思うけど、きっとそんな簡単なことではないんだろう。
結婚する前から、孫の話なんかしちゃってる母さん。
保育園の子供の声を聞いて、泣いたって言う小春さん。
僕は大人の気持ちも、女の人の気持ちも、なにひとつわからない。

「あそこ、行きません？」
「え？」
「スカッとするとこ」
一瞬きょとんとした小春さんが、ぷっと吹き出すように笑った。
「迷惑なんでしょ？」
「あれはウソ」
そう。迷惑なんかじゃ全然なかった。
小春さんが、元気のない僕を心配して誘ってくれたって、本当はちゃんとわかってた。
それなのにすねたような態度をとった僕は、どうしようもないコドモだった。

「俺、おごりますよ？」
「お母さんからお小遣いもらってるような子に、おごってもらうなんてできません」
そんなことを言いながらおかしそうに笑っている小春さんのことを、僕はなんとなく可愛いって思う。
十歳も年上なのに。
お姉さんみたいな、先生みたいな、でも友達みたいな不思議な人。
小春さんと並んで歩いていると、憂鬱な気分が消えていった。

12

美優が突然僕の家にやってきたのは、今にも雪でも降りそうな、どんよりとした休日の朝だった。
「付き合ってるのっ？」
半分寝ぼけていた僕に、美優は意味のわからない言葉を投げかけた。
「誰なのよ、あの女の人！　付き合ってるのっ？」
「……あの女の人って？」
「バッティングセンターで一緒にいた人！」
小春さん？　僕が小春さんといるとこ、美優に見られた？
「あの人は……俺の兄さんの彼女だけど？」
「はぁ？　お兄さんの彼女と、なんでトモが一緒にいるのよっ！」
なんだか僕は、さっきから文句を言われてるようだけど、どうして美優に文句を言われなくちゃならないのか、意味がわからない。
「あの、さ。俺が誰と一緒にいても、美優にはカンケーないと思うけど？」
僕の言葉に美優の頬が赤く染まる。
あれ？　なんで？　どうして？
「だって……俺たち、もうとっくに別れたじゃん？」
美優はさらに耳まで真っ赤にしている。
「しかも美優は、啓介と付き合ってるんだし」
「もう別れたもん！」
そう言いながら僕を見る美優の目は、なぜだかじんわりと潤んでいた。
「もう別れたの！」
「……なんで？」
「なんでって……だって……美優はまだトモのこと、好きだから！」

それは絶対ありえないはずの告白だった。

今年初めての雪が、かすかにちらつき始めた空の下、僕は美優と公園のベンチに座っていた。

だけど美優はしおらしくうつむいたまま、なんにもしゃべろうとはしない。

このままここにいても寒いだけだし……一体どうしたらいいんだよって思った時、美優がぽつりと口を開いた。

「トモに……気にして欲しかったの」

美優がしゃべってくれたことに、僕はとりあえずほっとする。

「啓介と付き合えば、トモが美優のこと気にしてくれるんじゃないかって……そう思って……」

それが啓介と付き合った理由？

「ねぇ……美優とトモ……もう一度付き合うのって無理？」

無理だろ？　そんなの。

僕は確かに美優を傷つけたかもしれないけど、僕だってもう十分傷つけられてるんだ。

「ねぇ、トモ……なんとか言ってよ」

「……無理だよ」

「やっぱり美優のことは好きじゃない？　キスしたときも、抱き合ったときも、全然美優のことは好きじゃなかった？」

「それは……」

全然好きじゃなかったわけはない。

今だって、美優は他の女の子より可愛いと思うし、全然好きじゃない子とキスなんかしない。

「美優バカだからさ、今ごろになってやっとわかったの。美優はすっごく、トモのこと好きだって」

美優の声が徐々にかすれる。

「トモに会えないと会いたいって思うし、トモが他の女の人といるとこ見たら、もうどうしたらいいかわかんなくなっちゃって……」

そう言いながら美優が泣いた。ぽろぽろ涙と鼻水をたらして、僕の隣で哀しそうに泣いた。

このまま美優の肩を抱き寄せたら、何もかもがうまくいくんじゃないだろうか？

美優はまた僕と付き合って、クラスのみんなはあきれたように笑って、啓介は怒るかもしれないけど、それもなんとかなっちゃって……何もかも都合よく、変われるんじゃないだろうか？

だけど――そんなことをしても、僕はきっと後悔する。

「ごめん……美優」

僕の声に美優が顔を上げる。

「やっぱり……美優とは、付き合えない」

人を好きになるって、どういうことなんだろう。

僕は美優と会えなくなっても平気だったし、美優が啓介といた時は、なんでだよって思ったけど、どうしたらいいかわかんなくなっちゃうなんて気持ちはなかった。

僕は美優が僕を想うほど、美優のことを好きじゃない。

それより僕は、誰かを本気で好きになったことさえないんだ。

力が抜けたようにうつむいて歩く、美優の背中を見送った。

白くて冷たい雪が舞う中、僕はいつもの踏切を渡る。

僕が渡り終わると同時に鳴りだす警報機。

その音は今日も寂しく、くすんだ色の空に吸い込まれていくようだった。

13

家に帰ると玄関に宏哉の革靴が脱いであった。
こんな時間にめずらしいな、なんて思いながら部屋に上がると、リビングから言い争うような声が聞こえてきた。

「どうしてそれが母さんのせいだって言うの？」
「母さんが余計なことを言うから、小春が来れなくなったんだろ？」
「余計なことじゃないでしょ、大切なことよ！　あんたが言えないから、母さんが代わりに言ってやったんじゃない」
「だからそれが余計なことだって言うんだよ！」
リビングで言い合っているのは、母さんと宏哉だった。
宏哉のこんなに大きな声を聞いたのは初めてで、だから僕はちょっとビビった。

「宏哉。あんた何にもわかってないのね？　あんたは一生自分の子供を抱けなくてもいいの？」
ああ……やっぱりそのことか。
僕が帰ってきたことに気づいた母さんは、一瞬言葉を切ったけど、すぐにまた口を開いた。
「母さんはね、あんたに普通の結婚をしてもらって、普通の家庭を作って欲しいのよ」
「子供がいないと普通じゃないのか？　僕は母さんの言う『普通の家庭』だけが、幸せとは思えない」
「じゃあ母さんが間違ってるって言うの？　孫を抱けないなんて、私は絶対嫌ですからね！」
「孫だったら……勇哉の子供がいるだろ？」
宏哉の声に母さんの顔色が変わる。
「勇哉の子供がいるからいいじゃないか」

「宏哉……」
「僕も僕の生きたいように生きるよ」
母さんに背中を向けた宏哉が僕の隣で立ち止まる。そしていつもの穏やかな表情で、少し笑ってこう言った。
「ずいぶん遅い反抗期だろ？」
それだけ言って宏哉が出て行く。残された母さんは、崩れるようにその場に座り込んだ。

「どうして……どうして宏哉まで……どうしてみんな出て行っちゃうの？」
母さんの背中は情けないほど小さく見えた。自分の母親をこうやって見下ろしているのは、なんだかとても変な気持ちだった。
「母さん……まだ俺がいるから」
消えそうな声でつぶやいてみる。
「母さんが望むなら、俺、絶対相南行くし、それから東大行って、宏哉よりもっといい会社入って、超美人な人と結婚して、子供五人ぐらい作って、そんで……」
そのあとは言葉にならなかった。何を言っているのか、自分でもわけがわからない。

「トモ……」
今にも泣き出しそうな顔をして、母さんが僕を見る。
ああ、そうか……僕はずっと、母さんにこうやって見て欲しかったんだ。
僕はここにいるよ、いつだってここにいるんだよって、気づいて欲しかったんだ。
「バカね……あんたが東大なんか行けるわけないでしょ」
母さんが鼻をすすりながら、そう言って笑う。
「それに、母さんのために勉強してどうするのよ」
それもそうだ。僕は宏哉に負けないくらいマザコンだ。

「ほんとに……トモはバカなんだから」
だけどこの日、僕は初めて、母親に自分の気持ちを伝えられた気がする。

14

今までろくに勉強してなかったくせに、トップ校なんかを狙ってる無謀な僕は、すでに担任教師から見放されていた。
きっと啓介や他のやつらは、僕の頭がおかしくなったとでも思ってるだろう。
体験授業を受けた塾には同じクラスのやつらがいて、やっぱり居心地が悪かったから、塾へは入らなかった。
だから僕はクリスマスも正月も、家にこもって勉強した。
絶対無理だと決めつけてる担任を見返してやりたかったし、塾に行ってるやつらに負けるのもシャクだったから。
そしていつの間にか僕は、自分がものすごく「頑張ってる」ことに気づいてしまった。
ありえない。あんなにカッコ悪いと思ってた「頑張る」ってこと。
僕は今、必死にやってる。

「あんたね、そこまで言うなら絶対やり遂げなさいよ」
そんな僕に向かって母さんが言う。
「一生に一度くらい死ぬ気で勉強すれば、あんただってなんとかなるわよ」
励まされてるのか、バカにされてるのかわからないけど、母さんは朝から晩まで口を出す。
放任主義から一転、どうやらこんな僕にも期待をかけ始めたのかもしれない。
ああ、でも、こんなことなら、ほっとかれたほうがましだったかも。
勇哉の言うとおり、あの頃の僕は「恵まれてた」のだ。
ウザい母親の話が長引きそうだったので、僕は逃げるように外へ

出た。
コンビニでも行こうと、たいしてあてもなく歩き始める。
真冬の冷たい空気が、あっという間に僕の体を冷たく冷やす。

いつもの踏切で立ち止まった。
勇哉はあれから音沙汰なしだし、宏哉もどこに行ったのかわからない。
そして……小春さんにも、もうずっと会ってなかった。
どうしてるのかな。宏哉と一緒に暮らしてるのかな。
初めて会った時みたいに、踏切の向こうに現れないかな。
よっ、元気って、いきなり僕の肩を叩いてくれないかな。

遮断機が下りて警報機が鳴りだした。
目の前を通り過ぎる電車を見送りながら、僕はぼんやりと考える。
会いたい。会いたい。あの人に会いたい。
警報機の音が止み、僕の周りが動き出す。
人が車が自転車が、僕を残したまま動き出す。
だけど僕は、その場に立ち尽くしたまま動けなかった。
だって……だって気づいてしまったから。
いつの間にか、兄さんの恋人を好きになってしまった、この気持ちに……。

15

年が明けたある日、僕が勉強をしていたら、勇哉がひょっこり顔を出した。
勇哉の赤くて長かった髪は、いつの間にか黒く短くなっていた。
「よう、トモ。元気にやってるか？」
「勇哉っ！　帰ってきたの？」
「いや、ちょっと荷物を取りに来ただけ」
勇哉は僕の前でいたずらっ子のように笑う。

「そう言えば宏哉も家出たらしいな」
「うん……でも、なんで知ってるの？」
「この前宏哉に会ったから」
「え……」
僕の胸がどくんと動く。別に宏哉の名前に反応したわけじゃない。宏哉と一緒にいるはずの、小春さんのことを思い出してしまったから。
「彼女と……一緒に暮らしてるって？」
聞きたいような聞きたくないような気持ちで、僕は言う。しかし勇哉の口から出た返事は、意外なものだった。
「それが違うんだよ。小春とはもうずっと会ってないって言うんだ」
「……会ってない？」
「別れたのかな？　あんな美人、マジもったいねぇ」
別れた？　別れたのか？　ほんとに？　どうして？
胸の中がざわざわして、どうしたらいいのかわからなくなる。

「トモ、なんかお前、ヘンじゃね？」
「べ、別に。いつもと同じだけど？」
「いや、絶対何か隠してる。おら、お兄ちゃんに言ってみなさい」

い、言ってしまいたい。けど絶対軽蔑される。いやそれより、笑い飛ばされるのがオチか。
だけどこんなこと、死んでも宏哉には相談できないし、相談するならやっぱ経験豊富な勇哉だよな。
でも勇哉みたいなおしゃべり男に言ったら、宏哉に知られてしまうのは時間の問題……いやそれどころか、本人に知られたらヤバすぎだろ？
「なにウジウジ考えてんだよ？　まさか小春にでも惚れたか？」
「な、な、なに言って……そんなの、そんなのって、まさかありえないでしょ？」
「……トモ、お前って、わかりやすいやつだな」
勇哉はじっと僕の顔を観察した後、満足そうにニヤリと笑う。
バレた？　勇哉に……僕が小春さんを好きなこと。
「バーカ。バレバレだっての」
勇哉は笑いながら、僕の額をぱちんと弾く。

「別にいんじゃね？　まだ結婚してるわけでもないんだし。まぁ、あっちがな。お前みたいなガキ、相手にしてくれるかわかんねーけど」
「……いいんだよ」
僕の声に勇哉が顔を向ける。
「別に言うつもりないし。俺は平和主義者だから」
「はんっ、つまんねー男。好きなら奪い取るくらいのこと、してみろっつーの」
もう一度僕の額をデコピンして、勇哉は階段をどかどかと降りていく。
「あっ、えっと、勇哉は？」
階段の途中で振り向く勇哉。
「ほんとに結婚したの？　こ、子供は？」
「すべて順調。問題なし」

ピッと親指を立ててにやりと笑うと、勇哉は僕の前から去って行った。

16

放課後、職員室に呼び出された。
志望校に願書を出す直前、担任は模試の結果を見ながら、「もう一度よく考えて」と僕に言う。
だけど僕は「このまま行く」と答えた。
「失敗しても責任は持てないから」
「先生のせいにしないから安心して」
担任はあきらめたようなため息をつく。
どうしてだろうな……前の僕だったら、ここまでしないと思うのに。
もうめんどくさくなって、さっさとあきらめてたと思うのに。

夕陽の差し込む廊下に出たら、窓にもたれて美優が立っていた。
美優は僕の姿に気がつくと、しゃきっと姿勢を正してぎこちなく笑う。
「どうしたの？」
「トモが職員室に入るとこ、見えたから」
あの初雪の日以来、美優は僕に話しかけてこなかった。
そして僕も、美優に話しかけることはなかった。
だから僕たちが話をするのは、本当に久しぶりのことだった。

「やっぱ相南受けるの？」
「受けるよ」
「自信あるんだ」
「ないけど、受ける」
僕の半歩後ろをついてきながら、美優がくすっと笑っている。
「トモのそういう言い方……」
「ムカつくだろ？」

「うん。けど、好き」
ちょっとあせって周りを見回す。窓の外から運動部の掛け声が聞こえてくるだけで、廊下にいるのは僕たちだけだ。
「好きとか言われても……困るし」
「わかってるよぉー」
美優はバッグを抱きしめて、ぴょんぴょんっと僕を追い越していく。
「じゃあっ！　またねっ」
うさぎみたいに揺れている美優の二つに結んだ髪を、僕はぼんやりと見送っていた。

＊＊＊

そんな僕たちの姿を、誰かに見られていたって気づいたのは、翌日のことだった。
体育が終わって教室に戻ってきた瞬間、「やられた」って思った。
僕のバッグや机の中が荒らされていて、教科書に小学生レベルの落書きがされていた。
『バカ』『死ね』『好きとか言われていい気になるな』
チャイムの音が鳴り、教室内に誰かの笑い声が響く。
その瞬間、僕の中でずっと張りつめていた細い糸が、ぷちっと音を立てて切れた気がした。

「これ書いたの、お前だろ！」
啓介の前に教科書を叩きつけたら、啓介は目を丸くして僕を見た。
「消せよ！」
「お、俺じゃない」
「これは絶対お前の字だ！　消せ！」
今まで何をされても無視してきた。
もとはと言えば、僕が美優にひどいことをしたからだとわかって

いたから。
「な、なんだよ……俺はトモの、そういう上から目線なとこが嫌いなんだよっ」
突然キレた僕と、それにビビっている啓介のことを、クラスの誰もが注目している。
見世物じゃないんだぞ、こっち見るな。
「なんにも頑張ってないくせに、美優に好きとか言われて……気分いいだろ？」
「お前……」
「トモは考えたことないんだ。美優の気持ちも、俺の気持ちも……なんの努力もしないで、好きって言われるの待ってるだけで……そういうのすごい頭くる」
手を伸ばして啓介の襟元をつかんだ。キャーって女子の悲鳴が聞こえて、それと同時に机の間に倒れ込む。
「な……殴るのかよ？」
僕に押し倒された啓介が、泣きそうな顔をしている。僕は握りしめた右手を、そのまま床に叩きつけた。
「トモ？」
泣き出したのは僕のほうだった。床に顔を押し付けて、子供みたいに泣いていた。
「トモ……だ、大丈夫か？」
啓介の情けない声が聞こえる。僕の名前を呼ぶ美優の声も聞こえる。
顔を上げられなかったのは、啓介の言った通りだからだ。
僕はなんの努力もしないで、好きって気持ちを伝えようともしないで……そのくせあの二人が別れるのを願ってる。
つまんねー男……そんな勇哉の声が、どこからか聞こえてくるようだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9455w/

桜色の明日

2011年10月21日11時02分発行